

高尾山山頂から発信！

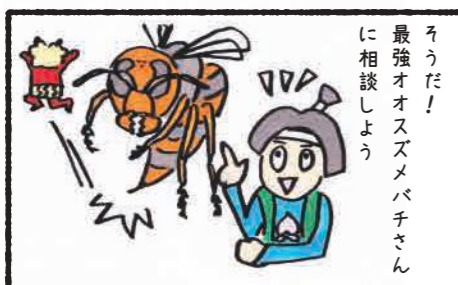
のぶすま

「のぶすま」とは
ムササビの古い呼び名です。

vol.41 季刊
2015年秋号

たかおさん

「鬼が島でワオ！」の巻



紅葉の高尾山 混雑による迷子にご注意！

赤・黄・オレンジの木々が彩る高尾山の秋。高尾山ではこの紅葉シーズンが1年を通してもっとも登山者の多くなる季節なのです。そうなるが増えるのが「迷子」。お子さんと保護者の方がはぐれるケースが一番多いものの、中には大人の迷子もあつたりします。

そうならないためには、以下の対策が大切！

高尾山での迷子対策

- ①グループ内での別行動はしない
→一度分かれてしまうと、そのあとの合流が難しくなるため、基本的にグループは一緒に行動しましょう。
- ②万が一はぐれた時の待ちあわせ場所を決めておく
→山内では、場所によって、携帯電話の電波がつかないところもしばしば…。万が一、はぐれた時を想定し、待ち合わせ場所をあらかじめ決めておくとGOOD!

そんなことに気をつけて、
高尾山の美しい紅葉を
是非みなさん楽しんで下さい！



解説員 しんらむ vol.3

もう一枚

秋はアザミやキクなど、色とりどりの花が咲く季節です。こうした花々の写真を撮って楽しむ方も多いのではないのでしょうか。写真を撮れば花の名前も知りたくなるのが人の常で、窓口でも「この花は何という名前ですか」と撮った写真のお問い合わせを頂く機会がよくあります。そして中には花だけがアップで写されているものもあるのですが、そのような時はいつもこう言います。「もう一枚撮って♡」と。きれいな花をアップで撮ることはとても素敵なのですが、花の名前を調べるには情報量が少なすぎるようです。花の名前を調べる時にポイントとなるのは、花、葉、全体の様子、生えている場所など。花の部分アップで撮ったら、少し下がってもう一枚。全体を撮っておくと、写真の持つ情報量が飛躍的に増し、自分で調べる時にもきつと役立つはずですよ。ぜひ、「もう一枚」を心に留めて、花の写真、そして高尾山の秋を楽しんで下さい。



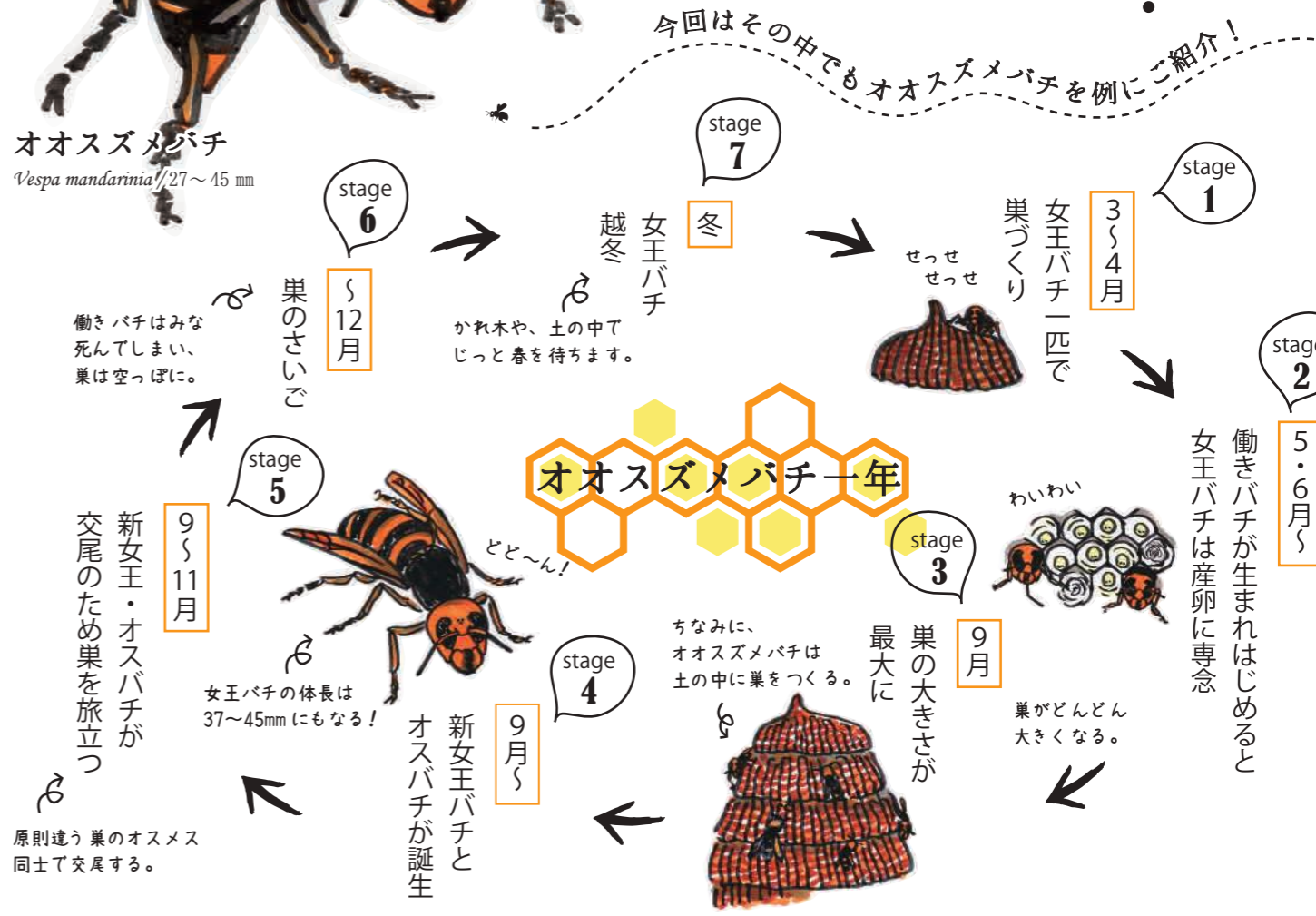
〈解説員 八木下〉



オオスズメバチ
Vespa mandarinia / 27~45 mm

スズメバチって どんな生きもの？

皆さんはスズメバチにどのような印象をお持ちでしょうか？
こわい！という声が多からずとも、なく聞こえてきそうですね…。
確かに、ハチは私たちにとても非常に危険な存在にもなり得ます。
しかし！今回は少し視点を変えて、「社会性」を持つスズメバチのユニークな世界を覗いてみましょう！



「のぶすま」最新号とバックナンバーを高尾山山頂にある、高尾ビジターセンターにて準備しております。ご希望の方はビジターセンター窓口までお越し下さい。



旧道を辿って

現在、ほとんどの登山者の方が京王線高尾山口駅で降りて登山を始めていますが、実は昔はそうではなかったといいます。では昔の人はいったいどの道を使っていたのか、痕跡を辿ってみましょう。

高尾山の魅力の一つは、何と言っても登山道入口のすぐ近くまで電車で行けるアクセスの良さでしょう。ですがその昔、京王線が高尾山口まで延びる以前には、高尾山口からでなく、別の登山口から登る人も大勢いたのです。今回は、高尾駅からの道のりで現れる、そんなふたつの古い道の紹介です。

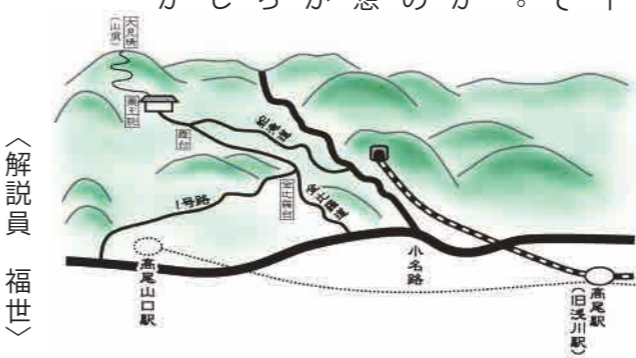
高尾駅から国道20号を西に進むと、小名路の交差点に差しかかります。ここで右に道を取って進むと、蛇滝口バス停を過ぎてまもなく、「蛇滝道」の入口を示す石の道標が現れます。高尾山が名所として多くの人々に親しまれるようになったのは江戸後期のことです。蛇滝道はその頃から多くの登山者があり、付近には茶屋や宿屋が並んでいたといえます。現在の高尾山口駅付近のような賑わいがあったということでしょうか。その賑わいの名残は通り沿いの峯尾茶屋（今は営業していませんが軒先にはずらつと高尾参拝者の札が並ぶ）などに見ることが出来ます。

再び小名路の交差点に戻り20号線を進みます。上柵田橋を渡るとやがて右手に「高尾山ちか道」と記された石の道標が現れます。このあたりは江戸時代に

は番所があった落合の集落で、ここからは「金比羅道」が伸びています。こちらも眺望の良い金毘羅台へ通じる近道として多くの登山者が利用していたことでしょう。

昭和の始めに出版された当時の高尾山観光ガイドブックである「高尾山誌」にも、これら「蛇滝道」「金比羅道」とその周辺の茶屋・宿屋が紹介されており、当時まだメジャーな登山道であったことがうかがえます。

昭和2年にケーブルカーがオープンし、昭和42年の京王高尾線の開通に至って、これらの道を使う登山者は珍しくなくなりましたが、今でも十分に整備されている登山道です。少し時間はかかりますが、昔の薬王院参拝に想いを馳せながら、高尾駅からの道のりを楽しんでみてはいかがでしょうか。



〈解説員 福世〉



ヤマホトトギスの名前のふしぎ

秋になるとおもしろい名前のお花が多く咲くなど思っていたのですが、中でも気になっていたのがヤマホトトギス。なんで鳥の名前がついているのか不思議だったんです。調べてみるとこの花、近い種類のホトトギス（これは高尾山にはありません）という花の斑点模様をホトトギスのお腹の模様に見立てて名前がつけられたそうです。これには驚きました。というのもこのホトトギスという鳥、高尾山で鳴き声がよく聞かれますが、姿を見ることがほとんどなかったからなんです。見られたとしても、その模様を観察するには双眼鏡が必要でした。そんな鳥の模様に見立てるなんて、名前をつけた人は、自然をじっくり見ていたんですね。



ホトトギス

ヤマホトトギス

秋には他にも、まだまだたくさんのお花と出会えます。名前の由来をひも解きながら観察すると、いつもとちがった花たちの一面が見えるかもしれませんね。

〈解説員 村上〉



stage 4/5 9~11月 女王バチの悲しいさいご

この頃、オオスズメバチの巣では働きバチによる女王バチ殺し（もしくは追放）が行われます。その時期、すでに女王バチは生産者としての役目を失ってきており、それを本能的に感じ取った働きバチたちが自身の母である女王バチを殺してしまうのです。

stage 4/5 9~11月 オスバチの大事な役目

オスバチの役目はただひとつ、新女王バチと交尾し、新しい命を託し繋げること。彼らはそのためだけに生まれるため、巣では一切働かず、冬を越すことなくその命を終えるのです。

stage 6 12月ごろ 巣の最後と命のバトン

秋から冬にかけて新女王バチが巣から旅立つと、働きバチたちは役目を失い、最後には全滅してしまいます。半年かけて造り上げてきた巣は空っぽとなり、以後二度と使われることはありません。

こうして、新女王バチだけが冬を越し、また次の春へと命を繋げるのです…

オオスズメバチのおもしろ生態

前ページの「stage 番号」と照らし合わせて！

stage 1 3~4月 巣のはじまりは一匹から

3~4月ごろ、越冬から目覚めた女王バチはたった一匹で巣を造り始めます。

stage 2 5・6月~ メスだらけの巣

「女王」と言うだけあって、女王バチはもちろんメスですが、その子として生まれてくる働きバチも全てメス。スズメバチの世界は女社会なのです。

stage 3 9月 働きバチはみんな姉妹

彼らは昆虫を狩ります。そして、その昆虫は働きバチ自らが食べるのではなく、幼虫のエサとして狩るのです。幼虫は同じ母（女王バチ）から生まれたわけですから、働きバチと幼虫は姉と妹の関係であり、自分の子ではないのです。

なんで刺す？

スズメバチが攻撃してくるケース

- ① 巣に接近した場合
- ② えさ場を荒らした場合
- ③ (人から) 攻撃を加えた場合

そう判断された時

ハチはこちらが巣に近づいた場合を除いて、一方的に攻撃を仕掛けてくるということはありません。彼らの攻撃的な一面は、「巣を守る」という強い防衛本能からきているのです。そのため、ハチと接近した時は、騒いだり、手で払ったりせずに、しずか~にその場から離れる。これが一番大切です。

さいごに

こうして彼らの1年を追ってみると、役割の違うハチたちが協力し合いながら1つの巣の中で暮らしていることがよくわかります。実は、それらの行動一つひとつが彼らの持つ「社会性」を意味し、またそれは彼らが次の世代に命を繋ぐために選んだ「手段」なのだということに気づくのです。

スズメバチには、まだまだ他にも興味深い話がたくさんあります。今回の記事が、皆さんにとってスズメバチの新たな一面を見るきっかけとなれば嬉しいです！

〈解説員 梅田〉